

学長のこ と ば

未曾有の大災害を目の前にして、何と書いていか分かりません。この過酷な現実を前にして、卒業式・スクーリングなどの学校行事の挙行を断念せざるを得ませんでした。まさに断腸の思いです。

亡くなられた方、まだ行方が分からない方、やっと一命をとりとめた方、そうした人々のことを思いやるとき言葉になりません。学生達の中に、この春、卒業予定にもかかわらず、或いは施設で実習中やボランティア中にもかかわらず、二つとない命を失った人やまだ安否の分からない人がいるという事実、この現実を忘れないでいただきたい。

しかし、いつまでも立ち止まっているわけにはいきません。生き、生かされた人は、亡くなった命の悲痛な叫びとその思いを心に深く刻み込み、明日に向けて、力いっぱい生き尽くすこと、それこそが残された者の使命に他なりません。

人の力ではどうにもならない地震や津波などの自然現象と人間の創る歴史とは異なります。歴史とは、未来に向けて一人ひとりが創り出すものです。平成23年3月11日14時46分の出来事を心に刻みつつ、新たな生を、新たな歴史を切り拓いていきましょう。

私を含め人間とは実に弱い存在です。しかし「絶望とは希望の母」であり「一刻の生、一刻の死」であることを、私は日々自分に言い聞かせています。極限状況の中こそ新たな力が宿ります。勇気を失うは全てを失う。勇気、それは自分で自分を励ます事です。

明日に向かって、人々と苦しみを分かち合いつつ、今をひたすらに、亡くなった多くの方々の思いを心に刻みながら、力の限り生き尽くしてください。

平成23年3月

学長 萩野 浩基 合掌